
テレビな私の日常

ふによ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テレビな私の日常

【Nコード】

N4940BA

【作者名】

ぷによ

【あらすじ】

恭太と優樹菜。二人の见たい番組は同じ時間に放送されていた。

電源が入れられた。

どうやら休み時間は終わりのようだ。

恭太がリモコンをこちらに向けて、五チャンネルのボタンを押したのを認識する。

ああ、こんなもう時間か……。私はすかさず画面を特撮ヒーロー番組、“ゴーゴーレンジャー”に切り替えた。

そこへどたとと駆け込んで来た妹の優樹菜が、テレビが点いているのを見るなり、リモコンを奪おうとお兄ちゃんの腕にしがみ付いた。

学校から走って帰って来たらしい彼女は、赤いランドセルを背負ったまま、荒い息を繰り返している。

「やだぁ！ ”まこ”を見るんだから！」

ちょうどゴーゴーレンジャーレッドのキメのポーズが画面いっぱいに広がると共に、勇ましいオープニングテーマ曲が流れ始めた所だった。

しかし流れる映像の横で、兄妹のチャンネル争奪戦はいよいよ激しさを増していく。

夕方のこの時間。優樹菜の好きなアニメ、“プリンセスセーラーまこ”は、ちょうど裏番組に当たっていた。

いつもは交互に録画して凌いでいたが、昨日の夜、そのビデオが壊れてしまったのだ。

背の低い妹から肝心要のそれを奪われまいと、恭太は腕を伸ばして高く掲げる。

いくらねても跳んでも届かない優樹菜は、身体の向きをくるりと変えると、テレビに駆け寄って本体のスイッチを押す作戦に打って出た。

が、押しても押しても、恭太はリモコンですぐに元に戻してしま

う。

幼い彼女にはリモコン受光部の位置が分からず、兄の横暴を防ぐ事が出来なかった。

まこ、ゴーゴー、まこ……。そして最後に画面は”ゴーゴー”で止まる。

「もう始まっちゃったじゃない！」

毎週毎回優樹菜が、画面を食い入るように見詰めているのは分かっていた。金切り声を上げたその瞳には、うっすらと涙まで溜まっている。

「お兄ちゃんのバカバカバカッ！」そしてお腹にパンチ、パンチ、パンチ。

ついに恭太に食って掛かった彼女は、突然何か閃いてランドセルを床に下すと、中を掻き回してにやりと笑った。

「じゃーん！」そんな効果音と共に取り出したのは、何ともうひとつのリモコンだった。

わざわざ友達から借りてきたのを思い出したらしい。

なれば戦闘は肉弾戦から赤外線を使ったビーム攻撃へと進化し、すぐに乱打戦が始まった。

互いにまったく譲らないまま、時間だけが不毛に過ぎていくのに気付かず、二人の睨み合いは延々と続く。

いい加減にしてくれ！　もしも私に口があったなら、間違いなくブチキレて怒鳴っていただろう。秒単位で画面を切り替えなければならぬ作業の連続に、私はいいい加減くたびれ果てていた。

どちらかが友達の家に行って見れば済む事じゃないか。

しかしちよっと型落ちのテレビたる私には、そんなアドバイスをしてやる事も出来なかった。

「何やってんの、あんた達は！　いい加減にしなさい！」

リビングで騒ぎ続ける二人に業を煮やし、ついに母親がその姿を現した。

結局組んず解れつのいがみ合いになった小さな子供達を引き離しながら、神のようにその手からリモコンを奪い去った彼女は、ついでに脳天に拳骨を落とした。

喚き声は泣き声に変わり、母親は今度こそげんなりした表情になる。

さらにそこへ同居しているおじいちゃんが登場した。

素知らぬ顔で三人の脇を擦り抜けた彼は、その注目を一身に浴びながらも、昨日から始まった大相撲にチャンネルを合わせた。

「幕内戦に間に合ったかな？」

「ひどいよ、おじいちゃん！」絶妙なハーモニーが抗議の声を上げた。

いつの間にか泣き止んだ二人は、揃ってその大きな身体に纏わり付くと、新たな強敵に対処する為に共同戦線を張る事にしたようだ。しかしどつかりとソファに腰を落ち着けたおじちゃんはびくともしない。

それ所か、逆にその大きな腕で両脇に抱えられてしまった二人は、悲しいかな、さして興味もない相撲中継を見る羽目になってしまった。

夕食時になってもがっくりと肩を落とす二人に、おじいちゃんは一枚のディスクを手渡した。

こうなる事を見越して、両方の番組の録画を友達に頼んでいたらしい。

壊れたレコーダーも再生機能だけは生きている。

「ありがとう！」飛び上がって喜んだ恭太と優樹菜は、あつという間にご飯を平らげると、リビングの私の元へ集結した。

私は再び子供達に占有される事になった。ただし今度は争い事はなしだ。

やがて夜も更け、静かになった家の中で、家族は就寝の為に電源を切った。

おじいちゃんはずべてお見通しだったという事か。

やるね、おじいちゃん。

薄れゆく意識の中で、最後にリビングを後にするその大きな背中
に、私はひと言、その声を掛けてから束の間の休息に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4940ba/>

テレビな私の日常

2012年1月13日19時58分発行